

算機にかなりの部分がさかれてるが、常に短かしたすきに長しといった感が深い。(計算機の機能の説明に過ぎ、システムにおける計算機のあり方の説明が少なすぎる)

本書の読者はORの手法集として読むならば失望を感じるであろうが、大きな Man Machine System

に対してどのような考え方をする可きか、設計にはどのような様な手続が取られ、どのようなOR的手法が取られるかについては貴重な考え方をあたえてくれる。たゞおもし可きことは手法が直接系の設計に適用されるものでないことであろう。

(原野秀永)

Operatidns Research—Methods and Problems

Maurce Sasieni, Arthur Yaspan, Lawrence

John Wiley and Sons, Inc. PP. 316 (1959), \$ 800

産業におけるORはいまや序論の域を脱脚して、実行段階に入った。そして実際問題をいかにモデル化し、それをどのように解くかという OR. Worker の skill が最も強く要望されるようになった。本書はこのような要求に充分答えうる立派な本である。

問題を認識し、関連情報を集め、これを解き、結果の解釈を行うというORの重要な skill を養うにはどうしたらよい? 恐らくその最上の方法は多くの実例に接し、演習問題を徹底的にこなしてみることであろう。

本書では、まず章を確率、サンプリング、在庫、取替待合せ、競合戦略、配分、順序づけ、DP、の各々に分類して、各章のはじめに一般理論とテクニックを述べ、次いでそれらを豊富な実例、例題を通して理解させ、さらに章の途中および終りに多数の演習問題を用意するという構成をとっている。しかもこれらの演習問題には解答ないしはヒントを与えている。

この実例、例題、演習問題などを蒐集し、評価し、整理して本書を作るに当っては、理論家と実際家の積極的な協力によって多くの努力が払われたに違いない、また実際にケース工大で教育用として使われ、そこでも取捨選択が行われたようである。

一読して感心したことは、引用例の多くのものが全く巧妙で、思わずうならせるような優れたものがみられることがある。実際に産業界のどこでも起きている問題であって、しかもORの手法で鮮かに解決できるというものを集めて本を作るということは実はなかなかむつかしいことである。

しかし本書にもいくつかの欠点がないわけではない。ORの問題として果してどのような手法で解いたらよいかわからないような大きな問題もあるし、一つの手法で解決できないで相互に関連した問題もある。すなわち問題に経営の高次の段階のものと、個々の手法で解決できるような低次の段階のものがあって、本書はどちらかといえば後者が対象である。前者と関連して経営全般とOR、ORの推進というより大きな問題に対して、本書では全くふれられていないが、これは同じケース工大から出ている Churchman, Ackoff, Arnoff らによるオペレーションズ・リサーチ入門に詳しいので恐らく重複をさけたのである。

本書は大学院ないしは大学上級生の半期のテキストとして作られたものであるが、内容的には微積分の知識だけで理解できる程度であって、あまり高いレベルのものではない。高度の数学的テクニックを要する問題については前提条件と結果の式を上げるにとどめている——もっとも現象の数式化にはある程度差支えないであろう。

また理論と方法の説明のところで述べられている数式の誘導のなかに必ずしもエレガントでないものもみられる。

ともあれ以上述べてきた多くの特徴と長所をそなえた本書は、実際家にとっても、学生にとってあるいはOR教育者にとっても大いに役立つことであろう。

(大前義次)